

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2019年度研究【経過】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名					
	社会学部・教授		水上 徹男 印					
研究課題	トランスナショナルな移住者と社会的結束性に関する社会学的研究							
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2020年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏名					
	立教大学・社会学部・教授		水上 徹男					
	立教大学・社会学部・教授		野呂 芳明					
	立教大学・社会学部・准教授		太田 麻希子					
	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・特任教授		木下 康仁					
研究期間	2019年度		～	2021年度				
研究経費※	2019年度		2020年度		2021年度	総計		
	2,105,784	円	0,000,000	円	0,000,000	円	2,105,784	円
(下段:採択金額)	2,370,000		1,840,000		1,750,000		5,960,000	

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、第一世代の移住者によるホスト社会への参加および日本からの帰還者による母国での社会活動に関する調査をおこない、移住者による社会的結束性の観点から日本の地域コミュニティの実情を提示することである。バングラデシュとフィリピンを対象に継続的な調査を実施し、トランスナショナルなネットワークの形成や移住者の社会的結束性を推進あるいは阻害する要因を明らかにする。(1)社会的結束性の概念やフレームの整理、(2)トランスナショナルなネットワークと社会的結束についての分析、(3)多文化化の進展が予測される日本社会の諸課題に対する社会的結束性の観点からの考察を実施して、最終的には政策的な提言につなげることを目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[社会的結束性] [トランスナショナルな移住者] [帰還移民]

研究【経過】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2019 年度は、研究および調査のフレーム構築と整備と国内外での調査を実施した。具体的には、社会的結束性 (Social Cohesion) に関する研究・調査の文献や資料の収集と整理した。また現地を訪問しての初発的フィールド調査を実施した。2020 年 1 月には、メルボルンの Monash Migration and Inclusion Centre を訪問し、本研究に関する国際会議を共催した。

2019 年度のバングラデシュ調査は、日本への移住者でマジョリティを占めるビクランプール (ムンシゴンジ県) 出身者を中心とした移住者のコミュニティに訪問した。ビクランプール出身の帰還移民、還流移民に現地でインタビューを実施するとともに、JETRO (日本貿易振興機構) のダッカ事務所など日本のバングラデシュのビジネスに関わる団体を訪問した。

2019 年度のフィリピン調査は、日本からの帰還移民や過去に日本とのビジネスに関わっていた人物にインタビューを実施した。

主な日程と調査地は以下の通りである。

2019 年 5 月 17 日 APFS 大山事務所訪問

Asian People's Friendship Society (APFS) は、本学の兼任講師として大学院のプロジェクト型授業を協働担当している吉成勝男氏をはじめとする日本人 5 名とバングラデシュ人 20 人ほどによって 1987 年 12 月に設立された団体である。当初からバングラデシュ移民との関わりが深い。日本における外国人移住者の支援活動の特定非営利活動法人であり、この団体の協力があってプロジェクトを進めている。

2019 年 5 月 24 日 蒲田マスジド訪問

ラマダン明けの行事に参加

上記 2 か所で、バングラデシュ移民の移住経緯や日本での生活に関するヒアリングを実施。

【現地における調査活動】**■ マニラ調査 (参加者: 太田、野呂)**

8 月に現地調査を実施した。第一に、日本の観光地の宿泊施設でフィリピン人ダンサーによる興行に関わっていた元経営者に当時の送り出しの実情や興行を始めた経緯について聞き取ることができた。第二に、フィリピン在住の非正規移民の女性らに対し、移動・帰国の過程や就労などについてインタビューを実施した。従来の日本のフィリピン人移住者に関する研究において、新たな知見につながる成果とネットワークを得ることができたと考えている。いずれの回答者も、実証研究の蓄積がある興行ビザによるバー・パブ等での就労に従事した、エンターテイナー女性の移住回路とは異なり、これまでにあまり研究対象化されてこなかった移住回路に関わっている。これらの回路を通じ移動した人びとは、移住や帰国の時期、ビザの種類やそのステータス等において多様な経緯をたどっていることがわかっている。今後は、本プロジェクト開始前に収集した元エンターテイナーの女性、非正規移住の男女などへのインタビューデータと併せ、フィリピンと日本の間のマクロな人の流れとの変遷の中に位置付けていく作業を行なっていく。

■ ダッカ調査 (参加者: 水上、野呂)

9 月に以下の通り現地調査を実施した。

- 1) ビクランプール出身の帰還移民へのインタビュー
- 2) ビクランプールの移民の出身村の訪問
- 3) 日本貿易振興機構 (JETRO) ダッカ事務所訪問

研究【経過】の概要 つづき

4) Press Conference の開催

ダッカの新聞社やテレビ局に向けたプロジェクト研究に関する記者会見を行い、研究代表水上が、プレゼンテーションを行った。“Rikkyo University Postgraduate Research Project 2019,” Affiliated with Asian People’s Friendship Society” (On 9th September 2019 at Pan Pacific Sonargaon Dhaka).

また、2019年10月には、バングラデシュの日本からの帰還移民調査に関する調査票を作成して、現地のアサヒ・コンサルタントに委託して、40件のインタビューデータを収集した。現在解析中である。

【研究成果の発表】

2020年1月25日に研究代表水上が国際会議“Social Cohesion and Urban Ethnicity”のチェア・パーソンとして、Monash Migration and Inclusion Centre と立教大学のグローバル都市研究所、ソウル市立大学の Institute of Urban Sciences が共催のシンポジウムを開催した。場所はモナシュ大学 Menzies Building であり、水上、野呂が発表した。

成果については、2020年度の国際社会学会 (Fourth ISA Forum of Sociology, Porto Alegre, Brazil, July 14-18, 2020) およびオーストラリアアジア研究学会 (2020 ASAA Conference at the University of Melbourne on 6-9 July) において、水上が発表する予定 (既に abstracts を提出) であったが、新型コロナウイルス蔓延の影響を受けて学会が延期となった。しかしながら、今後も研究成果を公開する国際シンポジウムを開催するとともに、報告書を制作・発行する。国内外の学会報告等を通じて、積極的に公開を進めていく予定である。最終的に、実証データを蓄積、分析結果に基づき社会的結束性を高める要因などの提示によって、コミュニティの再生に向けた指針を示すことを試みる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

Tetsuo MIZUKAMI. “Japan’s Pioneering Inner-City Research Conducted by the College of Sociology.” *Global Urban Studies*, No.13, 2019. Pp.29-36.

Tetsuo MIZUKAMI, Dharmalingam ARUNACHALAM and Ernest HEALY. ““Social Cohesion and Migrants’ Participation in the Host Community’: Report on Fifth International Symposium.” *Global Urban Studies*, No.13, 2019. Pp.37-40.

Wonho JANG and Tetsuo MIZUKAMI. “Report on ‘2019 CGCSE International Conference Urban Culture and Spaces for Social Empathy’.” *Global Urban Studies*, No.13, 2019. Pp.41-43.

Tetsuo MIZUKAMI, Dharmalingam ARUNACHALAM and Wonho JANG. “The 2020 Symposium on ‘Social Cohesion and Urban Ethnicity.’” *Global Urn Studies*, No.13, 2019. Pp.45-48.

水上徹男 「バングラデシュ人 —新しい層の流入と第2世代以降の定着」駒井洋 (監修) 小林真生 (編) 『移民・ディアスポラ研究9 変容する移民コミュニティ 時間・空間・階層』2020年 Pp.98-100.

③

International symposium, “Social Cohesion and Urban Ethnicity.” 2020年1月25日
Menzies Building, Monash University, Melbourne.

Yoshiaki Edwin Noro. “New Residential Trends of Foreign Migrants in the Suburban Tokyo.”

Tetsuo Mizukami. “The Generation of Bangladesh Communities in Japan.”

International Conference on Urban Culture and Spaces for Social Empathy. 2019年11月1日
Law School Conference Room, The University of Seoul.

Tetsuo Mizukami. “The University’s Two Pioneering Inner-City Research Projects Left on Japan’s Sociological Trails.”